

あとがき

本書は、筆者がこの10年ほどの間に執筆した論文のうち、建築のストック活用に関連するものを中心にとりまとめたものである。元となる論文はそれぞれ執筆した時期が異なり独立したものであるが、根底にある都市や建築に関する考え方は、30年前、MITに留学した時にハブラーケン教授から教わった理論に大きな影響を受けているように思う。私がMITに留学したのは1984年9月から2年間であるが、当時、MITのキャンパスの北にあるN52校舎で行なわれていたハブラーケン教授の設計論に関する講義は、世界各国から集まった多くの大学院生の目を見開かせるものであった。講義では世界各地の多様な居住環境 (Built Environment) の実例を紹介し、都市や建築の多様性や経年変化を観察することによって、それを構成している真の原理が見えてくると教えていただいた。私の拙い論文は、ハブラーケン先生のこの言葉に触発されたところが大きい。教授とはMIT修了後も、CIB (建築研究国際協議会) のW104分科会 (Open Building Implementation : オープンビルディングの実践) の年次会議の場などで定期的にお会いする機会があり、今日にいたるまで教えを請うことができたのは幸いであった。私は2005年4月から現在の勤務先で建築構法の講義を担当させていただいている。かつて自分が学んだことや経験したことを、日本の建築界の現状や将来に応用可能な形にして、若い世代に伝えたいと思っているが、本書の内容は私が大学で講義している内容も数多く含まれている。

2004年9月20・22日、パリのCSTB (Centre Scientifique et Technique du Bâtiment) にて、CIB W104の第10回会議が開催された。ハブラーケン教授はそのプロシーディングに「Change and the Distribution of Design」と題する論文を

報告されている。この論文は本書が論じた建築ストックの活用に関して、今後私たちが取り組むべき課題を、最も端的に示しているので、以下にその要旨を紹介したい。

「モダニズムには建築を複数のレベルとして捉えておらず、複雑な都市構造を単純なひとつのレベルのものとして捉えがちである。つまり大きなものを単調な繰り返しとして扱っている。ダイナミックに変化し、個性を重んじると称する現代において、人類史上かつてないほど、レベルの分化に硬直的で、時間の感覚に乏しいとは皮肉である。『形態は機能に従う』というモダニストのドグマを否定する。時間を意識した建築において、機能は予測不可能なものである。もはや建築は機能に従うことはできないのだから、変化のコンテクストとして、また居住者による多様性として捉えなおす必要がある。このことは形の形成におけるレベルの分化に繋がる。同時に設計における責任の分担にも繋がる。」

日本の建築界はストック活用が本格化している。私も、国土交通省の持続可能社会における既存共同住宅ストックの再生に向けた勉強会 (第1回…2012年2月6日) (第5回…同8月23日) や社会資本整備審議会・交通政策審議会技術分科会技術部会社会資本メンテナンス戦略小委員会 (第1回…2012年8月29日) (第9回…2013年10月30日) の末席に加えていただき、国の基本的な政策検討に微力ながら参加させていただいたことを感謝している。大学教育も既存ストック活用に関する教育を充実させていかなければならないと感じる。日本の多くの大学の建築設計演習の課題は、今なお小学校や集合住宅、図書館や美術館を新築する課題が多い。しかし学生が社会に出て関わる仕事の多くは、既存の建築ストックをどう活用するかという、新築より遙かに知恵も技術も必要な仕事である。MITに留学したとき、町並みの中

にある既存の建物の改修が設計課題として出題されているのを見て驚いたが、日本の教育もようやく同じような状況になっただけのことかもしれない。

30年前、MITの都市建築学部の図書館で経験したことは今でも、鮮明に私の記憶に残っている。全米を代表する蔵書数を誇る建築図書館であるMITローチライブラリーは入り口付近に雑誌コーナーがあった。日本の建築雑誌もほぼすべてそろっており、日本の建築に対する関心の高さは、ある意味、誇らしく思っていた。ある日、閲覧室にいると有名な設計担当の教授が大学院生を10名ほど連れて図書館に入ってきた。そして日本の建築雑誌を指さし、「君たち、この雑誌を見てごらん。これらの建築は雑誌に掲載されることを目指して設計されている。君たちはこういう建築を作ってはいけない。こういう建築家になんてはいけない。」と言われたのである。時代や洋の東西をとわず、建築家にとってメディアで取り上げられることは、仕事を獲得する建築家としての階段を昇っていくためには重要なことである。しかしMITの教授たちは、建築家の仕事はまず Humble(謙虚)なものでなければならないと教えていた。

東京と大阪の中央郵便局を設計し、日本のモダニズム建築の黎明期に活躍した吉田鉄郎(注1)は、建築家は自我を殺すことも必要であると述べている(注2)。建築に美が求められることは自明であるが、それと同時に何十年に渡り、建物によっては100年以上の長い期間に渡って多くの人に使用され、都市の中に存在し続ける使命を担っている。所有者や設計者の思いだけではなく、その時代の社会が求めるものを受け止め、柔軟に対応していかなければならない。既存の都市や建築の再編・再生の仕事が多くなった今日、建築の仕事に携わるものは、社会が何を求めているのか、自分たちの職能について今一度、謙虚に考え直さなければならぬように思う。

■注

- 1) 吉田鉄郎(1894年5月18日～1956年9月8日)、逓信省の建築家。
- 2) 志摩徹郎(吉田鉄郎のペンネーム)、世界の現代建築、1930年